



御堂筋の かたまり

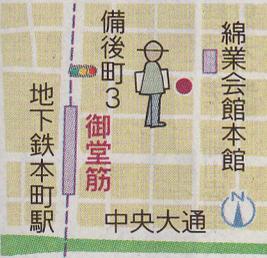
業が中心となって法人、個人会員の社交場として活用されてきたという。こんな伝統と品格のあるエリート世界があるのも、大阪の誇りであり民間の財産である。同時に、この財産を今後どう生かしていったらよいのか考えてしまうが、これだけ

がいっぱい詰まっている。例えば、木目調の大理石を柱にした会議室のドア、アンモナイトの化石が見えるフロアの大理石などは、石の文化の原点を思わせる。政界トップが座った特別室には、獣足のアンティークな椅子やテーブル、シャンデリアが、建設された昭和初期のままで残っている。芳名録には鳩山一郎、芦田均、犬養健、石橋湛山などお歴々のサインがあり、昭和11(1936)年となっていた。この部屋の調度品はすべてヨーロッパ製であり、当時の一流文化がうかがえる。設計面でも、柱に埋め込まれた館内用空調ダクト、各階から投函できるメールダクト、戦火からの類焼を防いだ網目耐火ガラスの窓など、当時と

産業界の社交場として活用

は言える。現代社会においては、無意識に流されるままに行動している、模造品や仮想社会の中で生かされている場合が結構ある。だから何が本物で、それが最高品かを知るのも意味がある。建物には本物、最高品のエッセンスが詰まっている。出席する国際会場として民間・市民レベルの権威ある国際交流の場にするのも一つのアイデアだ。会員制倶楽部のエリート性を持ちながら、市民とつながる活動も始めているのはうれしい。予約制であるが、毎月第4土曜日に食事つき見学会などを実施したり、三休橋筋街づくりフォーラムの会場になったりしている。玄関先に立つガス燈が、周辺の街並みとよく

地下鉄御堂筋線本町駅付近でスケッチをしていた。三休橋筋はどの辺になりますか」と道を尋ねられた。これがヒントで今回、この筋にある綿業会館を取材訪問した。御堂筋より3本東の筋の角地にあった。古めかしいが重量感のある7階建ての洋館。鉄柵に囲まれた本館の玄関口に立つと、「社団法人日本綿業倶楽部、建物・重要文化財」の銘板が目に入る。鉄格子模様の中扉を開けて中央ホールに立った瞬間、私は中世ヨーロッパの宮殿に案内された浦島太郎になっていた。事務局幹部自ら、倶楽部会員食堂、談話室、会議室などを丁寧に案内してくれた。戦前は皇室、政財界の貴公子たちが迎賓館として使い、戦後は産業界・ビジネス界の有力企



メモ 綿業会館 昭和7(1932)年、日本綿業倶楽部の建物として開館。平成15(2003)年、国の重要文化財に指定される。内部公開(有料)は毎月第4土曜日。予約・問い合わせは同会館(06・6231・4881)。

ガラスの窓など、当時とマッチしていた。